総長尾形典男
―遠い記憶の断片から

山中　一弘

「理事会が何と言うか」

一九七五年七月三日。夏休みを間近に控えた立教大学五号館一階の一五一（現五一二一）教室。

暗い廊下に面した薄暗い階段教室は、五百ほどある座席の六割がたが埋まっており、熱と湿気に満ちていた。

定刻からほどなくして、学生席から見下ろす扉に痩身でシルバーグレーの髪、浅黒い顔に眼鏡をかけた初老の教授が現れた。その瞬間、学生の一部から期せずして拍手が起った。

教授は怪訝そうな顔で前列の学生となにやら会話を交わし、「ああ」と小声で呟いたかと思うと、「つまらんことを」の言葉を飲み込んだかのような顔つきで教壇に上がった。この日、大学の総長候補者選挙の結果この教授が当選したという事実を、目ざとい学生は学内の掲示で確認していたのだ。

スーツに包まれた教授の体は折れそうに細いが、教壇の上を左右に歩く足取りは確かで堂々としている。

「まだ大学内の選挙で、これから理事会が何と言うか分からんから……」

教授は真面目な顔でこう述べると、この話題を早々に切り上げ講義を始めた。法学部専門科目「政治原論1」。二年次以上に配当された、政治系の入門科目である。

「素直に喜べばいいのに、相変わらずひねくれてるなあ、このオッサンは。」

日頃無縁の理事会というものが大学の選挙結果を動かすなど、学生には想像もつかないことだったから、教授の態度には苦笑せざるをえなかった。

この「ひねくれたオッサン」は、尾形典男。

法学部二年次生だった私は、このときの光景を三十年以上たったいまでも、深い感慨とともに思い出す。三年後には、この「オッサン」から辞令を受け取っていたのだから。

七五年当時、立教学院寄附行為は第二七条に「立教大学総長の任命は、立教大学教職員の選挙にもとづき、理事会においてこれを行う。」と定め、第二九条に「立教学院長、立教大学総長、立教高等学校長、立教中学校長および立教小学校長の資格は、聖公会の聖職又は信徒であるものとする。」（傍点引用者）と定めていた。いわゆるクリスチャン・コードである。

ただし二九条には続きがあり、「なお、立教大学総長

については、その他第一条の目的を支持するものをこれに加える。」とある。第一条の「目的」とは「キリスト教に基づく教育をほどこす」学院設置の目的のことで、これを「支持する」こと、すなわちあえて「アンチ・クリスト」を標榜しないかぎり、大学の総長は広く非信徒にもその資格を与えようということだ。

この部分が加わった改正は一九七一年十二月に申請され、翌七二年一月十三日に認可されているが、認可後最初に就任した総長は佃正昊理学部教授で、聖公会信徒であった。

つまりあの七月三日は、改正寄附行為下で初めて聖職・信徒以外の総長候補者が大学において選出された、歴史的な日だったのだ。

その事実を知ったいま、そして総長尾形の仕事の重さを片鱗ながらも知ったいま、あの日の尾形教授の、いささか硬い表情にも納得できるものがある。

「結婚とは、経済的な価値と性的な価値の交換である。」

「盗人や食いつめ者が寄り集まって作った国が、世界に向って正義だ民主主義だと……」

独特の言い回しで学生をケムに巻いていた尾形教授の総長任命は七月四日の立教学院理事会で決定され、翌五日、立教大学史上初めての「非信徒総長」が誕生した。（なお大学は尾形を「第十代・十一代総長」と称しているが、永井均・豊田雅幸が指摘しているように、現行の総長歴代の算定は誤りである。）

主計大尉から総長まで

尾形典男は一九一五（大正四）年九月九日、千葉県に、尾形猛男、ひでよの長男として生まれた。父親は小学校教員で、後に千葉市教育委員長まで務めた。

典男は旧制千葉中学校を経て一九三四（昭和九）年、仙台の旧制第二高等学校（文科乙類）に進んだ。高校では端艇部（ボート部）に入る。

三七年には東京帝国大学法学部政治学科に入学。南原繁、矢部貞治、田中二郎教授らの指導を受け、四一年三月卒業。

同年七月には法学部助手に任用されたが、八月、海軍経理学校に短期現役第七期補修学生として首席で入学。学生長、第一斑班長を務めた。

十二月同校を卒業、第二艦隊旗艦愛宕に乗務したのち、海軍経理学校指導官付、京城在勤海軍武官付、京城監査官監理官、第三十一突撃隊主計長兼分隊長（長崎県松浦郡）、などを歴任、海軍主計大尉として長崎で終戦を迎えた。

四五年九月には東京帝国大学大学院特別研究生となり復員したが、四六年十月、旧制第二高等学校講師の職を

得て仙台に転居。また翌四七年には北海道帝国大学法文学部助教授として札幌に移り、政治学第一講座を担当した。学部はその後法経学部に改組され、五二年教授に昇任した尾形は、五三年の法学部開設にも尽力した。しかし五五年四月末、持病の喘息、神経痛、家族の病気などのため、一家で東京に転居。しばらく北大の講義は集中講義で行ったが、五七年六月辞職した。

同年七月、尾形は立教と初めて出会う。

定年退官後立教へ移ることになっていた東京大学の宮沢俊義、菊井維大両教授から、立教大学法学部設立準備への協力を依頼された。北大法学部開設時の手腕が買われたのだ。尾形は文部省への申請書類を作成し、立教学院理事会、立教大学部長会などにも積極的に説明に出た。

はじめ「立教大学の一員になる心算はなかった」尾形は、理事長・八代斌助主教に「だまされて」立教大学への奉職を決意した。五八年二月、尾形は嘱託として立教大学のメンバーに加わり、学部設立の実務を担った。

五九年、立教大学法学部が開設すると、教授、学科長として草創期の学部運営に奔走。六七年には学部長、六八年には学院常務理事となり、大学行政の中枢にもかかわるようになる。とくに六九年には、大須賀潔総長の下で総長室長を務め、大学紛争に直面した。

以上が「総長」尾形の前歴である。

「これが立教なんだ」

七五年に総長に就任したというだけで、人は尾形に敬意を表すべきである。

二年前の七三年秋には、立教一〇〇年の歴史を一気に突き崩す醜聞「大場事件」が発覚、学内の混乱収集もおぼつかない中で、七四年、学院創立一〇〇周年の年は、記念行事もままならないままに過ぎ去って行った。

六九年七〇年と吹き荒れた大学紛争の残滓も、いまだ渦巻いていた。七四年一月には、学費値上げに反対する学生により全学ストライキが強行され、この渦中で佃総長は学費改定を白紙撤回する。

七三年の石油ショックで「狂乱物価」などと呼ばれたインフレが進行する中でのこの措置は、七四年度、約三十億円の予算規模の中で八億七〇〇〇万円もの赤字を生んだ。

学生は、教室の椅子を締め付けるビスすら効かない腐った床の上をふわふわと歩き、動くことを忘れたブラインドの間から漏れる日差しに耐えながら授業を聴いた。大学には、授業とクラブ活動以外のプログラムは無いに等しかった。

尾形が責任を負うことになったのは、そんな大学であった。

尾形はまず、大学の長期計画を策定すべく、諮問機関「教学改善委員会」を設置した。

財政破綻、施設老朽化、それらに起因する諸活動の停滞、そして寄贈者東武鉄道との約束に反して一向進展しない新座校地の利用問題。学生はもちろん、一部教職員からも強い反発の予想されるテーマに、果敢に挑む姿勢は鮮烈であった。

学費改定、寄附集めなど、尾形の財政再建に懸ける意気込みには、とりわけすさまじいものがあった。

学生運動の余韻も残る中、学内ではたびたび「学費値上げ反対」「志木移転反対」を叫ぶ学生の過激な行動が繰り広げられた。総長室長が学生に捕まって、事実上「監禁」状態に陥ったこともあった。総長が単独でキャンパスを歩くことなど、危険で許されなかった。

何か騒動があると、部署にかかわらず「男子職員で可能な者」は夜遅くまで残り、学生と対峙したものだった。

そんな一夜。食事もとらずに深夜までかけて騒動を収束させた職員有志が、教務部の大部屋に集まり、カップ麺を前にタクシー分乗など帰宅の指示を受けていたところに総長が現れた。

「立教の財政は危機に瀕している。学費改訂は不退転の決意をもって行う」と改めて強い決意を述べた尾形が、珍しく職員を前に感謝の言葉を口にした、その直後。

「これが立教なんだ」

尾形の言葉が涙で詰まった。

学部草創期には、職員を「バカ野郎」などと怒鳴りつけていた強面が見せた、意外な一面だった。

毎回困難を極めた学費改訂は、その後尾形時代末期の八一年十二月発表した「物価スライド制」というウルトラCの導入で「自動的に」行えるようになる。蛇足ながら、九〇年代以降に続いた立教大学の発展は、この時代からの蓄積に多くを負っている。

財政面の改革以外でも、十九年ぶりの新校舎九号館の建設、新座利用の端緒となる新座保存書庫の建設、国際交流制度の拡充、広報の充実、コンピュータ・センター設置による事務電算化の推進、法学部社会人入試、同推薦入試、文学部B入試（主に論文による）などの入試改革……。尾形が主導し、あるいは後押しした改革は、枚挙にいとまが無い。

「何も無い」大学だったのだ。何をやっても「改革」だった。

線　路

私学財政の困窮をなんとかしようという尾形の情熱は、学外でも発揮されていた。われわれ一般職員の目には触れないところでの役職が、相当数にのぼっていた。世間

が尾形を必要としていた。しかし尾形も超人ではない。

総長二期目も半ばの八一年九月、日本社会党行政改革問題等に関する教育関係者との懇談会に、私大連の代表として出席した尾形は、意見陳述中に脳動脈瘤出血に襲われる。しかし耳が聞こえなくなるという症状の中でも陳述を続行。終了後、新宿区の社会保険中央病院に入院した。

十月に動脈瘤摘出の手術を終えリハビリに励みながら、十二月には先に述べた学費の物価スライド制導入を発表、翌八二年四月からは、少しずつ総長業務に接触しはじめた。九月には、大学に出勤するかたわらでリハビリのため板橋の病院に通うようになった。だが問題の山積する大学で陣頭指揮をとる総長としての体力は、戻ってこなかった。

八二年十月八日、「立教大学の教職員・学生のみなさんへ」の文書を公にし、尾形は立教を去った。

改革の総仕上げは、「新座校地の利用を核とした長期計画の策定」となるはずであった。

一九九〇年三月三十一日、立教大学新座キャンパス竣工感謝式が挙行された。

利光理事長、浜田総長とともにテープカットに加わった院長は、尾形を「だました」斌助主教の息子、八代崇主教であった。

尾形は、自ら敷いた線路の上に建ったこの大きな駅を見ることなく、一月十八日、他界していた。

（了）

総長室にて